

# 和のストリングス

箏曲演奏家・遠藤千晶 12



(撮影・島崎信一)

えんどう・ちあき 福島女子(現・橋高東京芸術大卒、同大学院修了。第8回長合検校記念全国邦楽コンクール最優秀賞、第62回文化庁芸術祭新人賞、第38回松尾芸能賞新人賞などを受賞。中学校の教科書「中学生の器楽」(教育芸術社)にも取り上げられている。

「あとは、よしなに」  
作曲家 松下功先生の口癖だった。今春、東京芸大副学長を退官する記念に企画していたコンサートは、昨年九月に先生が急逝した

は、そのリズムの緻密さにある。例えば一定の長さの音符を十分割するパート、七分割するパート……という具合で、音楽というよりまるで数学のようだ。

気持ちが強すぎて、オーケストラの音と溶け込まない部分が多すぎた。  
今回の演奏では、スコアを愛情深く読み込んだ指揮者の指摘によって、それぞれのパートの絡み合いで

## 余韻嫋嫋

# 織り成す糸として

ことよりの追悼コンサートになってしまった。

過去に、この曲を二回演奏したが、リズムが崩れないよう自分を保つのに必死だったように思う。また、「ソリストだから」という

ことを思った。

「芸術文化を桜の木に、新人生をその蕾(つぼみ)に例えた」と「芸術家として活躍する人はほんのひと握りであり、それ以外はその人を磨く研磨剤となれ」というもの。

その日、初演する予定だった曲は未完となり、その曲名(余韻嫋嫋(よいんじょうじょう))は、そのままコンサートタイトルとなった。このコンサートのためにドイツから来日した、松下先生の親友シヨルト・ナジ氏の指揮の下、私は、二〇一六年委嘱初演の

「ソリストだから」というくレース編みのように、織り成される音楽の美しさに気が付くことができた。それは、まるで、細い一本の糸が織り成しているように、繊

細で優しいものだった。私が、それまで必死に鳴らしてきた「ソリストとしての音」は、本来は、大きな音楽を構築するためのひとつだったのだ。その自覚と共に、前回の拙稿でふれた芸大入学式における二通りの学長式辞の

「舞あそぶ音に―箏とオーケストラのための―」を演奏した。

松下作品の特徴のひとつ

作曲家も指揮者もソリストもオケも、当然のことながら優劣はなく、ひとつの

「松下作品の特徴のひとつ」

「松下作品の特徴のひとつ」

「松下作品の特徴のひとつ」



コンサートの演奏後、指揮者のシヨルト・ナジ氏と(2月14日、東京・紀尾井ホール)

「松下作品の特徴のひとつ」